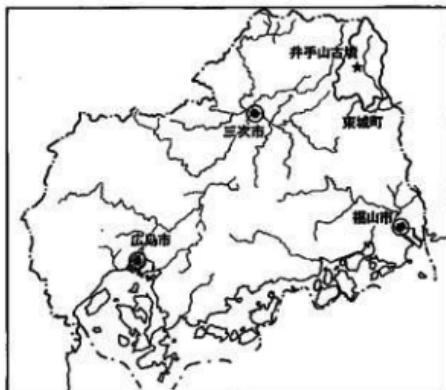


井手山古墳

1989

財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター

井手山古墳



1989

財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター

例　　言

1. 本書は、広域営農団地農道整備事業（東城地区）に係る井手山古墳（比婆郡東城町大字田黒字井手山 340-2）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、広島県庄原農林事務所から委託を受けて財団法人広島県埋蔵文化財調査センターが実施した。
3. 発掘調査は、財団法人広島県埋蔵文化財調査センターの調査研究員恵谷泰典・荒木清二が行い、整理作業及び本書の執筆・編集は恵谷が行った。
4. 本書に使用した方位はすべて磁北である。
5. 本書に掲載した第1図は、建設省国土地理院発行の1:50,000の地形図（庄原）を使用した。
6. 挿図と図版の遺物番号は同一である。
7. 土器の断面は、須恵器を黒ヌリ、土師器は白ヌキとした。

目　　次

I はじめに	(1)
II 位置と環境	(2)
III 調査の概要	(5)
IV 遺構と遺物	(7)
V まとめ	(13)

挿図目次

第1図	周辺遺跡分布図 (1: 50,000)	(3)
第2図	遺跡位置図 (1: 5,000)	(4)
第3図	周辺地形図 (1: 1,000)	(5)
第4図	遺構配置図 (1: 100)	(6)
第5図	墳丘土層断面図 (1: 60)	(8)
第6図	石室及び掘り方実測図 (1: 60)	(9)
第7図	石室内遺物出土状況実測図 (1: 40)	(10)
第8図	出土遺物実測図 I (1: 3)	(11)
第9図	出土遺物実測図 II (1: 2, 1: 1)	(12)

図 版 目 次

I はじめに

井手山古墳の発掘調査は、広域営農団地整備事業の一環として計画された東城地区的農道整備事業に伴うものである。東城町南部には中国自動車道を始めとする国道・主要地方道が整備され、基幹農道としての役割を果たしているのに対し、北部の道路は急峻な地形をぬって走るため幅員が狭くて急カーブが多く、農産物の輸送に不便をきたしている。この地区は、中国自動車道の開通により京阪神等の大消費地への時間が大幅に短縮され、経済立地が大きく変わりつつある。そこで収益性の高い農業経営の確立のため、稻作を基幹とした畜産・野菜・地域特産物（果樹）の団地化をめざし、高速道を利用した産地直販や観光農業の拡大を図るため、広域営農団地計画で配置する各種農業施設を結節した農道を整備することが必要とされていた。

昭和60(1985)年8月、広島県庄原農林事務所（以下「庄原農林」という。）から広島県教育委員会（以下「県教委」という。）あてに、広域営農団地農道整備事業（東城地区）の計画地内の文化財等の有無及び取扱いについての協議があった。これをうけた県教委は周知の遺跡はないが試掘の必要がある旨の回答をし、昭和61(1986)年10月に試掘調査を行い横穴式石室を確認した。県教委は庄原農林と遺跡の保存について協議を行ったところ、予定地北側に変更すると農地から遠く離れて農道としての役割を果たせず、南側はほ場整備事業地にかかってしまうことから、現状保存は困難であり発掘調査による記録保存が必要であるとの結論に達した。このことから昭和62(1987)年11月、庄原農林は財団法人広島県埋蔵文化財調査センター（以下「センター」という。）に発掘調査を依頼し、昭和63(1988)年8月、庄原農林とセンターとの間に委託契約が締結された。発掘調査は同年9月26日から11月2日まで約1.5か月間実施した。また、10月29日には東城町教育委員会と共に遺跡見学会を開催した。本報告書はこの調査の成果をまとめたものである。この地域における歴史研究の一助になれば幸いである。

なお、調査にあたっては広島県教育委員会の指導を得るとともに、東城町教育委員会、広島県庄原農林事務所及び地元の方々から多大な協力を得た。末筆ながら記して感謝の意を表したい。

II 位置と環境

東城町は広島県の東北端に位置し、北は鳥取県、東は岡山県に接している。地形は中国山地に連なる道後山（標高 1,269 m）・三国山（標高 1,004 m）などの山々が北部を東西に走り、山々から派生した渓谷が南部に延びる。この渓谷は石灰岩地帯で洞窟や岩陰などが形成され、帝釈峠遺跡群が知られている。河川は東城川が北部から中部に、帝釈川が南部に流れ、共に高梁川水系である成羽川に合流する。町内の約 3 分の 2 は標高 500 m 以上の高位にあり、平野は狭小である。古くは山陰山陽交通の要路として、また備中・備後の藩境の要衝として栄えた町である。

井手山古墳は東城町のほぼ中央部の田黒地区に位置する。標高 600 m 前後の山々の裾部にあたる丘陵の西側斜面に立地する。標高は約 525 m である。山間の谷あいの狭小な水田に臨んでいる。水田面との比高差は約 20 m である。

東城町の遺跡を以下時代ごとに概観する。

旧石器時代 帝釈馬渡岩陰遺跡が知られ、安山岩製の刃器と剣片が獣骨と共に出土している¹⁾。

縄文時代 帝釈峠遺跡群²⁾が主である。帝釈馬渡岩陰遺跡からは草創期の無文土器、早期の押型文土器や有茎尖頭器・石鎌が出土している。帝釈寄倉岩陰遺跡からは後期に埋葬された多数の人骨が発見されている。帝釈名越岩陰遺跡では後期の堆積層から柱穴列が検出され、また底部に粉痕のある晩期の土器が出土している。

弥生時代 戸宇大仙山遺跡・牛川遺跡が調査されている³⁾。戸宇大仙山遺跡では中期の、牛川遺跡では後期のそれぞれ土塙墓群が明らかになっている。吉備系と山陰系の土器が出土していることから、山陰と山陽との交流を窺わせている。

古墳時代 古墳は町内に約 300 基確認されており⁴⁾、ほぼ南部に集中している。前期の前方後円墳も數基存在するが、大部分は狭小な谷筋に 2 ~ 3 基単位で点在する後期の小円墳である。前期古墳の調査例としては、大迫山第 1 号古墳・中央山古墳群などがある。特に大迫山第 1 号古墳は、全長約 48 m と 4 世紀代の古墳としては広島県最大である。竪穴式石室から筒形銅器・鐵鎌が出土している⁵⁾。後期古墳の調査例としては、犬塚古墳群⁶⁾・横ヶ峰第 2 号古墳⁷⁾などがある。犬塚第 1 号古墳はこの地域で最初に横穴式石室を採用したものとされている⁸⁾。

古墳時代以降の遺跡としては、近世から近代にかけてたら製鉄が行われており、その痕跡を町内で数多くみることができる。

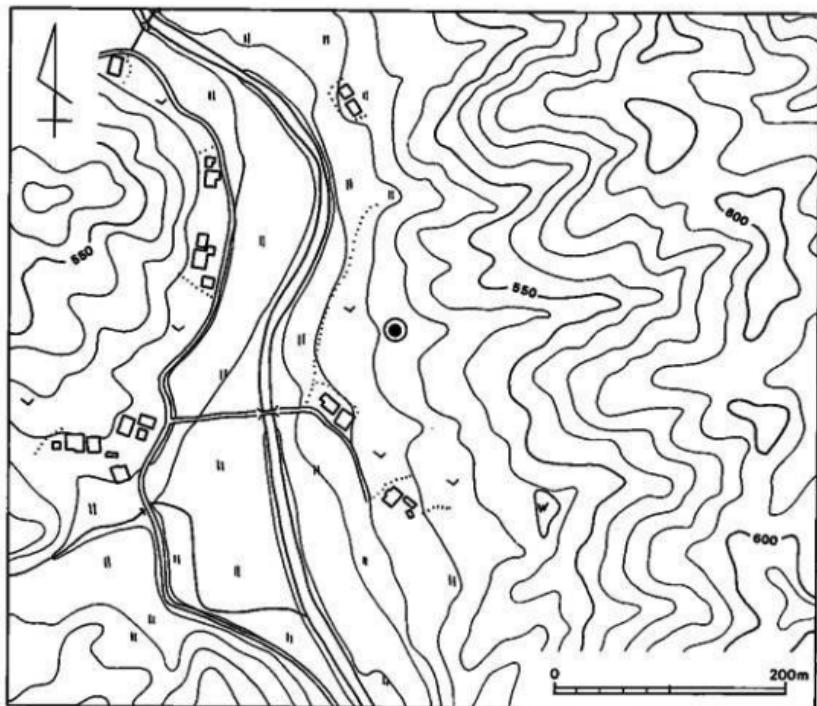


第1図 周辺遺跡分布図 (1:50,000)

- | | | | |
|-----------|------------|------------|----------|
| A. 井手山古墳 | 1. 坊主古墳 | 2. 長敏古墳 | 3. 市場古墳 |
| 4. 梶ヶ峰古墳群 | 5. 次石古墳 | 6. 是安山古墳 | 7. 篠原古墳 |
| 8. 川平山古墳 | 9. 大番藏山古墳 | 10. 大足山古墳群 | 11. 保田古墳 |
| 12. 朴の木古墳 | 13. 上五十石古墳 | 14. 上菅古墳 | 15. 下菅古墳 |
| 16. 梨原山古墳 | 17. 塚追古墳群 | 18. 受原古墳 | |

註

- (1) 帝釈峠遺跡群発掘調査団編『帝釈峠遺跡群』亞紀信男 1976(昭和 51)年
- (2) 註(1)と同じ
- (3) 広島県教育委員会「中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」(2) 1979(昭和 54)年
- (4) 離波宗朋・藤井岑雄編「東城町所在文化財地名表」「中央山古墳群の発掘調査」 1978(昭和 53)年
- (5) 現地説明会資料による
- (6) 犬塚古墳群発掘調査団「犬塚古墳群発掘調査報告書」 1980(昭和 55)年
- (7) 広島県教育委員会・財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「横ヶ崎第 2 号古墳発掘調査報告」 1983(昭和 58)年
- (8) 潤見浩「犬塚第 1 号古墳」『広島県文化財ニュース』90 号 1983(昭和 58)年



第2図 遺跡位置図 (1:5,000)

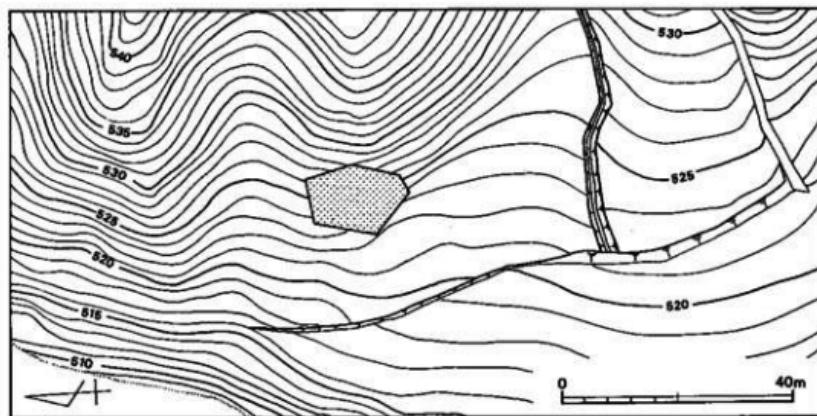
III 調査の概要

調査前の状況

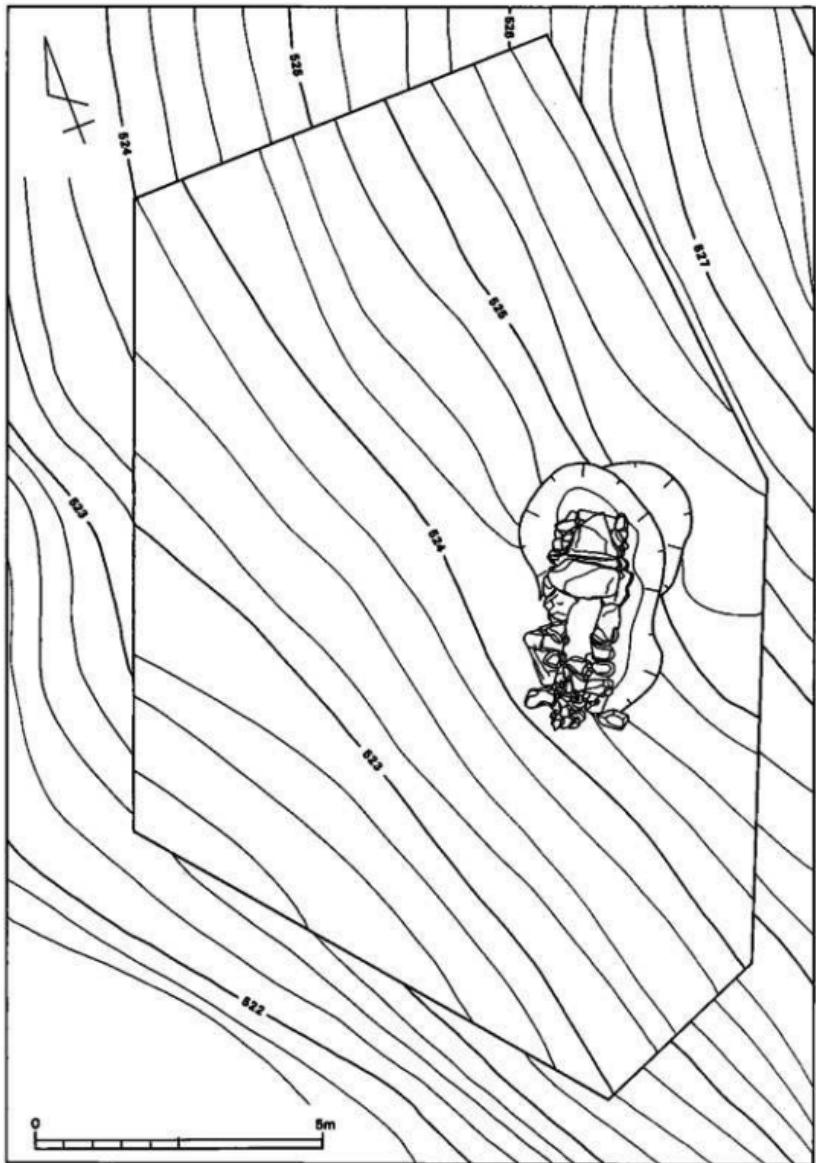
本古墳は丘陵の西側斜面に立地していた。この斜面には杉の植林が行われていて、古墳の存在は知られていなかった。墳丘はほぼ完全に流失していて、植林の伐開後も外観からは確認できなかった。また天井石の一部が露出し、周辺に石材の散乱が認められるだけで、遺物も散布していなかった。

調査の経過

古墳の石室は、当初地形から斜面に従って西側に向いていると考えられたが、実際は南南西に開口していた。また、露出していた天井石も側壁の崩壊に伴い原位置から動いていることが判明した。現在の基本的層序は、表土（暗褐色砂質土）・漸移層（灰褐色砂質土）・黒ボク（黒褐色粘質土）・地山（暗褐色粘質土）・吉備土（黄褐色粘質土）である。内部主体は無袖の横穴式石室である。石室規模は残存長3.4m、幅0.7m、高さ1mである。天井石は3枚残存していた。奥壁は一枚石が使用されていた。側壁は東側が崩壊しかかっていたが、西側の残存状況は良好であった。開口部には閉塞石を置くことにより封鎖施設としていた。石室床面は攪乱を受けていなかった。石室掘り方は、斜面に立地しているため西側は検出できなかった。周溝も確認できなかった。遺物は少なく、須恵器・土師器・鉄刀子・ガラス小玉が出土している。古墳の築造時期は概ね7世紀前半から中頃と考えられる。また後世に石室の再利用が行われていた。



第3図 周辺地形図(1:1,000)(アミ目は調査区)



第4図 遺構配置図 (1:100)

IV 遺構と遺物

墳丘

盛土はほとんど流失していて、東側を 0.3~0.4 m 確認するにとどまった。西側は斜面の下側になるため完全に流出していた。この盛土には、石室掘り方の排土も一部利用されている。残存している墳丘端部から推定して、直径 6 m 前後的小規模な円墳と考えられよう。周溝は調査区が限られていたため完全には確認できなかったが、石室背面の調査からみると周溝としての地山整形はほとんど行っていなかった。ただ、斜面上側の調査区外を段状に若干掘り凹めていた可能性はある。

内部主体

本古墳は無袖の横穴式石室を持つ。主軸方向は N 30°E を指し、ほぼ南々西に開口する。石室の現存長は東壁で約 3.4 m、西壁で約 3.3 m、幅は奥壁部約 0.8 m、奥壁から 1.5 m の位置で約 0.7 m、開口部で約 0.7 m とほぼ平行であるが、やや狭窄の感がある。天井石付近の幅は約 0.5 m と狭くなるがそれも一様ではない。高さは奥壁部で約 1.1 m、奥壁より 1 m の位置で約 1 m であり、開口部に向って下り気味である。側壁は石材が転落していく天井石と共に崩れかかっているが、基底石を取りはずした痕跡は認められず、石室規模は築造時と変わりないと考えられる。

天井石は 3 枚残存していたが、開口部側の 1 枚は側壁の崩壊のため原位置になかった。この石材が最も大形で、0.9×1 m、厚さ 0.3~0.4 m である。他の 2 枚は、大きさこそ 0.6×1.2 m、0.8×0.9 m だが厚さは 0.2 m 未満と扁平である。

奥壁は 0.8×1.3 m、厚さ 0.2 m の扁平な一枚石を使用している。この奥壁はやや前傾し、これを挟み込むように両側壁が積み上げられている。

東側の側壁は天井石付近の石材が崩れかかっていて、西側の側壁と比べると残存状態は良くない。基底石として 4 個の石材を使用し、すべて広口積みである。石材の大きさは長さ 0.4~1.1 m、高さ 0.5~0.7 m、厚さ 0.2~0.4 m である。奥壁側の 3 つはいずれも長さが 1 m 前後と大きさをそろえ、横長に使用しているが、開口部の石材だけは縦長である。高さはほぼそろえてある。基底石直上の石材は長さ 0.6~0.8 m、厚さ 0.2 m の比較的扁平な石を横手積みしている。3 段目より上は長さ 0.3 m、厚さ 0.2 m 程度の小ぶりの石を小口積みしている。石の形が不揃いのため石と石の間隙は、礫や割り石で充填している。

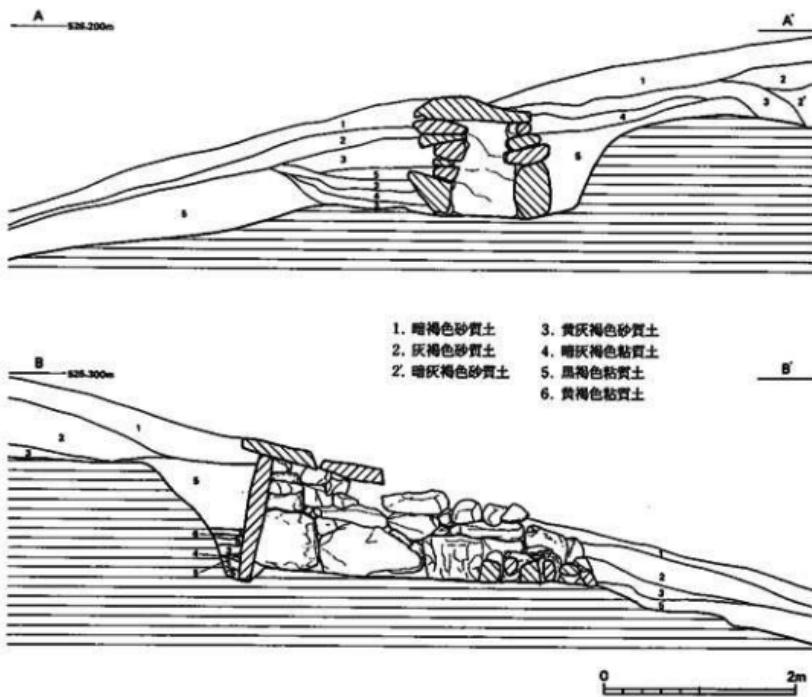
西側壁の残存状態は比較的良好である。基底石は 5 つ使用している。石材の大きさは長さ 0.3~1.1 m、高さ 0.4~0.9 m、厚さ 0.2~0.6 m である。奥壁側の 2 つは厚さ 0.2 m と

薄く、縦長に広口積みしている。奥壁から3・4番目は共に長さ1m以上で、幅と厚さが共に0.5m前後と厚みのある石を横手積みしている。開口部の石は縦長の広口積みである。2段目以上はほとんど厚さが0.2m未満の石材で、横手積み及び小口積みである。天井石までは4段ないしは5段である。石の間隙にはやはり礫を充填している。

石の安定を図るために地山への掘り込みは、奥壁と西側壁の奥壁に接する基底石、そして開口部の両側に縦長に立ててある基底石の下に認められる。その他の石は掘り込まないで直に設置し、底部が尖り不安定な石の下には礫をかませて倒壊を防いでいる。

両側壁はやや内傾気味に立ち上がる。これは持ち送り技法といえなくもないが、側壁の石材が不揃いなため傾いたとも考えられる。概ね大きく分厚い石材を下から順に積み上げているが、奥壁と接する基底石は共に扁平で安定性に欠けている。

このように基底石としては不適当と思える石を使用したり、石材のなかに河原石が含まれる。

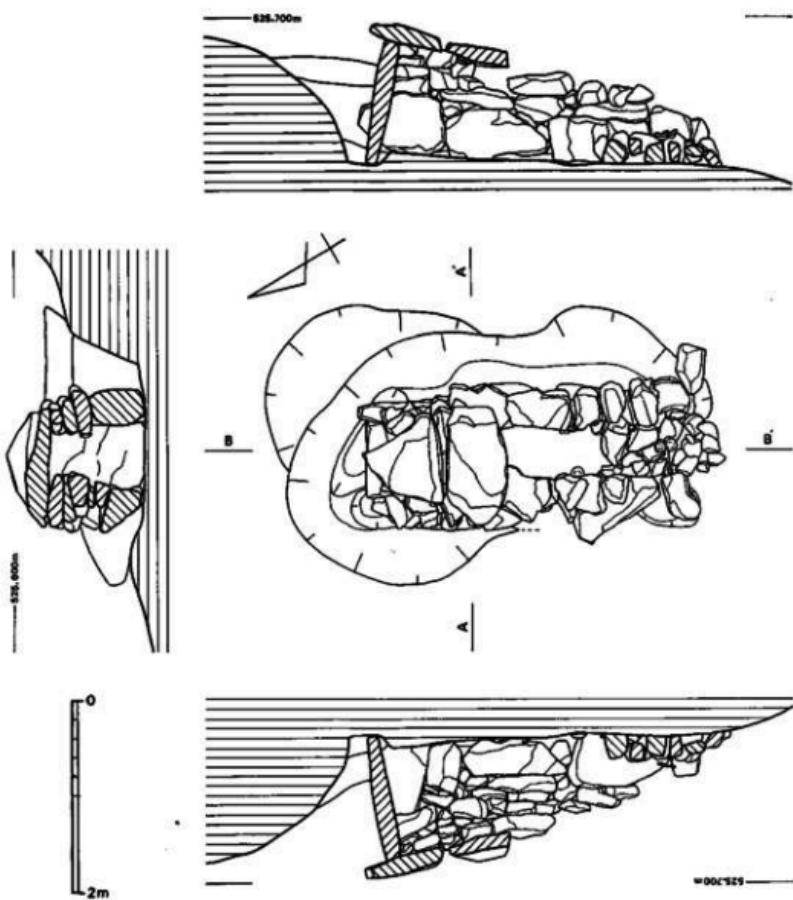


第5図 墳丘土層断面図 (1:60)

れているところから、限られた石材のなかで、いろいろと操作して石室を構築したと考えられる。

開口部の封鎖施設には閉塞石が用いられている。奥壁より 2.4 m~3.6 m の間約 1.2 m の範囲で検出した。現存高は 0.15~0.3 m で、基底石しか残存していない。使用された石材は径 0.1~0.3 m 程度の礫で、やや乱雑に積んでいる。

石室底面は地山面まで検出したところ水平ではなく、自然地形に沿ってやや傾斜してい



第6図 石室及び掘り方実測図 (1:60)

る。また遺物が地山面から若干浮いた状態で出土していることから、棺床土を敷いていた可能性が高い。棺台石は検出できなかった。

石室掘り方

平面形は少し歪んだ梢円形を呈している。北東側が削られていて石材搬入の痕跡と考えられる。長軸約4.6m, 短軸約2.6mを測る。深さは奥壁側で約1.2m, 東壁側で約1mである。西壁側は斜面下側のため、奥壁部では約0.6mを測るが開口部へ行くに従って低くなり、背面の肩部から約2.5mのところで消失する。立ち上がりは底面近くの傾斜は急であるが、上へ昇るほどゆるやかになる。底面の規模は長軸約3.8m, 短軸約1.4mである。奥壁の底面は地山下層である吉備土にまで掘り込んでいる。

石室と掘り方の間は裏込め土で固めている。この土は、石室掘り方を掘ったときに出た土を利用している。古墳築造時の基本的層序は、黄灰褐色砂質土・黒褐色粘質土（黒ボク）・暗灰褐色粘質土（地山）・黄褐色粘質土（吉備土）と推定する。東壁側の裏込めは黒ボクのみで固めている。奥壁側と西壁側は、まず黄灰褐色砂質土を基本に黒ボク・地山土・吉備土を交互に叩き締めている。この互層状の裏込めは底面より約0.4mのところでまで、その上を奥壁側は黒ボク、西壁側は黄灰褐色砂質土と單一土で固めている。裏込めの順序としては、まず東壁側をある程度まで一度に固め、次に奥壁側と西壁側を約半分ほど固めて石材の安定を図ってから、奥壁→西壁の順で固めている。

遺物出土状況

遺物は石室床面、閉塞石、石室前面から出土した。石室内では、奥壁から0.1mの中央部でガラス小玉を検出した。また西側壁ぎわで、奥壁から1.3m, 1.6m, 2.1mのところでそれぞれ鉄刀子各1と須恵器杯身1が出土した。開口部の閉塞石の上から須恵器杯身3と土師器椀1が2つずつ重なり合って出土している。また閉塞石の間から須恵器高杯・平瓶が各1出土した。石室前面には須恵器の破片が散乱していた。

出土遺物

本古墳から出土した遺物は、須恵器（杯蓋・杯身・高杯・平瓶）・土師器（椀）・鉄刀子・ガラス小玉である。



第7図 石室内遺物出土
状況実測図（1:40）

土器（第8図）

1、3は石室前面、2は石室床面、4～7、10は閉塞石の上、8、9は閉塞石の間からそれぞれ出土した。特に4～6、10は重なり合っていたものである。

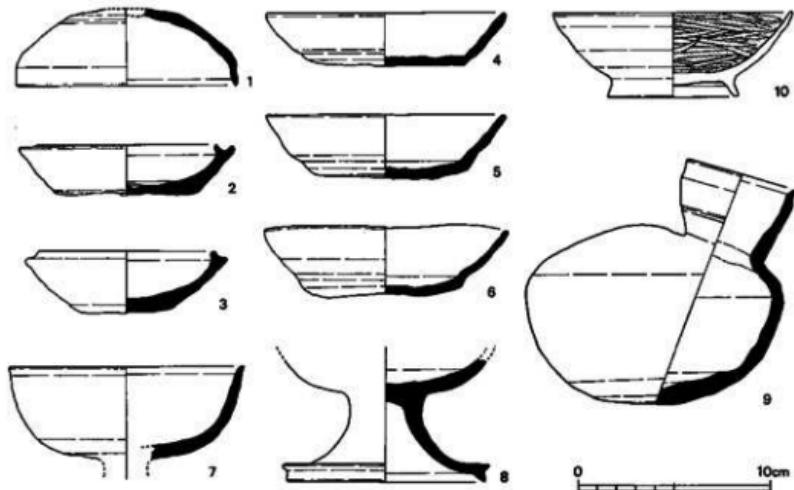
1～9は須恵器である。1は杯蓋片で、復元径11.4cm、器高4.0cmである。口縁端部を少し内に屈曲させている。全体的に薄手である。頂部を回転ヘラ削りし、全体にヨコナデ調整を施している。色調は灰白色を呈し、軟質である。

2～6は杯身であり、形態的に受部をもつI類と受部のないII類に分類できる。

I類（2、3）は径9.0～9.4cm、器高2.6～3.2cmを測る。立ち上がり、受部共に短く鈍い。全体的に厚手である。底部は平坦で、回転ヘラ切り調整の痕跡がある。その他はヨコナデ調整である。色調は灰白色を呈し、焼成は普通である。

II類（4～6）は径12.4～12.6cm、器高2.7～3.5cmを測る。平坦な底部から斜めに延びる口縁部を持ち、端部を丸くおさめる。6は口縁が少し歪む。全体的に薄手である。底部を回転ヘラ削り後にナデしている以外はヨコナデ調整である。色調は灰～濃灰色で、焼成良好である。6には自然釉がかかっている。

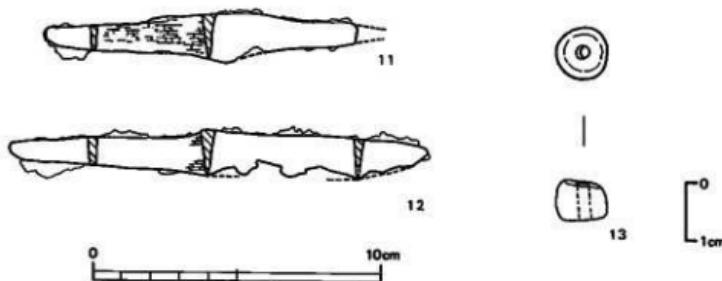
7は高杯の杯部である。復元口径は12.0cm、深さは4.1cmと深い。杯底部から丸味をもって口縁部が立ち上がり、端部が若干外反する。調整はヨコナデである。色調は黒灰～白



第8図 出土遺物実測図 I (1:3)

灰色で、焼成は普通である。8は高杯の脚部である。ラッパ状に短く外反し、端部は横にのびて下方に拡張し、共に丸くおさめる。脚柱部は太く、ゆるやかに杯部と接合する。調整は脚部内面の杯との接合部を指オサエしている以外はヨコナデである。色調は濃灰～灰色で、焼成良好である。杯底面には自然釉がかかる。9は平瓶である。口径6.0cm、器高12.7cm、最大径は胴部中位よりやや上方で13.4cmを測る。口縁端部は小さく外反し、外面に一条の凹線が巡る。体部は丸く張り、高さ9.2cmを測る。底部は丸底である。調整は胴部に回転ヘラナデを施し、底部を回転ヘラ削りの後ヘラナデしている。それ以外はヨコナデである。封鎖痕は内面頂部にみられる。また内面には破裂孔が認められる。色調は灰白～灰色で、上面に自然釉がかかる。堅緻に焼成され、断面セピア色である。

10は土師器の一種で黒色土器の椀である。口径12.4cm、器高4.4cmを測る。緩く外反する口縁部に断面三角形の貼付高台がつく。高台径は6.6cmである。内面は丁寧なヘラ磨きを全面に施し、外面はやや風化しているが、粗いヘラナデを部分的に残す。胎土は精緻で焼成良好である。色調は内面黒灰色、外面淡赤褐色を呈する。この種の土器は焼成の際、内面に炭素を吸着させて保水性をもたせている。



第9図 出土遺物実測図 II (1:2, 1:1)

鉄器・玉類（第9図）

11, 12は鉄製の刀子である。11は刃部が欠損し、残存長10.9cm、幅は茎部0.6cm、関部1.7cmを測る。厚さは背幅で0.3～0.5cmである。茎部に部分的な木質痕を残す。12は刃部を少し欠くが、ほぼ完形で全長14.3cm、幅は刃部1.3cm、関部1.5cm、茎部0.5cmを測る。厚さは背幅で0.3～0.5cmである。関は両側に拡がる両関である。茎部に縦走する木質痕が認められる。13はガラス小玉である。径0.9cm、孔径0.25cm、厚さ0.7cmを測る。重量は0.64gである。孔はやや斜めに穿孔している。色調は濃青色を呈する。

V ま　と　め

井手山古墳の遺構と遺物は以上の通りである。ここでは発掘調査によって明らかになつた事柄について概説を述べ、まとめにかえたい。

石室について

本古墳は、全長 3.4 m、幅 0.7 m の横穴式石室を内部主体とする。一人分の遺体しか埋葬しえない規模を指摘し得る。石の絶対量が限られていたと想定できる。特に奥壁側の天井石 2 枚は厚さ 0.2 m 未満と薄い石材なのに対し、開口部側には厚さ 0.4 m 近い石材を設置している。これは石室の表側に厚手の石を置くことにより、石室を大きく見せることを意図していると考えられる。奥壁の石材は厚さ 0.2 m 未満と薄く不安定であり、この状態を解消するため両側の基底石で挟み込み、3 枚の石材を相互に支えて安定を図っている。さらにこれは、奥壁の幅を最大限利用することで石室の狭さを少しでも補おうという工夫と考えたい。使用された石材も扁平な割り石から丸味のある河原石まで様々である。石の大きさも不揃いで、総じて寄せ集めの感が強い。

墳丘について

古墳の立地が丘陵の斜面であるため盛土はほとんど流失していたが、墳頂の残存部から復元すると直径 6 m 前後的小円墳と推定できる。また、古墳は斜面下側から仰ぎ見る格好になり、視覚的には実際以上に高く見えるが、本来の墳高は直径から考えても 2 m 以下が妥当であろう。周溝の存在は確認できなかったが、立地と自然地形の兼ね合いからみて石室背面を半円形または馬蹄形に巡るようなものではなく、斜面上側をテラス状に少し掘り込んだだけのものである蓋然性が高い。

遺物について

出土遺物はほとんどが須恵器である。時期的に 2 つに分けられ、I 類の杯身と高杯・平瓶は 7 世紀第 2 四半期に、II 類の杯身は 9 世紀後半から 10 世紀頃に比定できる。このことから古墳の築造年代は 7 世紀前半～中頃であり、初葬もこれとほぼ同時期と考えられる。鉄刀子やガラス小玉はほぼ石室床面上で検出され、床面は搅乱をうけていないことから初葬に伴う副葬品であろう。鉄釘が全く出土していないことから木棺を使用せず直葬の可能性もある。

次に黒色土器の椀についてであるが、内面のみ黒色のものは A 類、外表面共に黒色のものは B 類とされている。本古墳出土のものは黒色土器 A 類の範疇にはいり「内黒土師器」とも呼ばれる。黒色土器は畿内において 8 世紀を初現として、9～11 世紀に盛行する。土

器の特徴と須恵器の杯身Ⅱ類が共伴している状況から、本古墳出土の黒色土器は概ね10世紀を中心とした時期に比定できよう。ただ、これらの土器が追葬時の副葬品であるかどうか明確にはできないが、少なくとも何らかの形で石室が再利用された時に伴うものであることは疑いのないところであろう。

石室の再利用について

石室内から異なる時期の遺物が出土した際、時期の新しい方を追葬時の副葬品と考えることは充分可能である。しかし、遺物間の年代的な隔たりが極端に大きくなる場合を除いては、古墳の継続利用かそれともその他の用途に関係するものかを区別することは困難である。畿内では8～10世紀初頭までの古墳の再利用は埋葬としての使用が主流であるとの知見もあり、さらに古墳の被葬者と再利用者との関係に言及しているが確認できる事例は少ない。広島県内における類例には安芸郡海田町歎觀音免第1号古墳、豊田郡本郷町天高第1号古墳、福山市今津町高岩第1号古墳などがある。共に平安時代から中世にかけての土器が石室内から出土しているが、その性格については不明である。

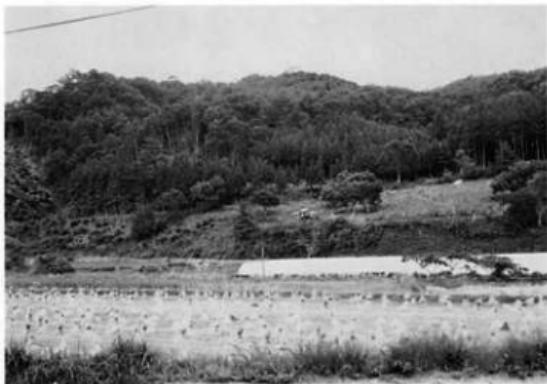
結語

東城町内の古墳は、単独または2～3基単位の小円墳である後期古墳が多い。これは狭小な谷あいに立地するという地理的制約もあげられるが、家族墓的性格を有するため、初めの被葬者に連なる者の墓を次々に築造できなかったからとも考えられる。本古墳は周辺の古墳と比較すると小規模で、石室の構築も限られた石材で行われていると考えられることから、被葬者がこの地域では小さな勢力しか有していなかったのではないかと推定できる。石室の再利用については、追葬かどうか明確にはできなかったが、興味深い調査例となつた。

参考文献

- 中村浩『和泉陶邑窯の研究』柏書房 1981(昭和56)年
森下惠介「黒い器」「花園史学」第8号 花園大学史学会 1987(昭和62)年
間壁麻子「八・九世紀の古墳再利用について」「日本宗教社会史論叢」国書刊行会 1982(昭和57)年
広島県安芸郡海田町教育委員会「歎觀音免古墳群」1979(昭和54)年
財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「天高第1号古墳」1983(昭和58)年
建設省福山工事事務所・財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「高岩第1号古墳」「松永バイパス建設地内埋蔵文化財発掘調査報告」1984(昭和59)年

a. 遺跡遠景（南西から）



b. 調査前近景
(南西から)



c. 同 上 (南東から)



a. 表土剥ぎ後 (南から)



b. 土層断面 (南から)



c. 同 上 (南から)



a. 石室検出状況

(南から)



b. 同 上 (東から)



c. 奥壁裏込め状況

(西から)



a. 石室開口部遺物
出土状況 (南から)



b. 同 上 (西から)



c. 石室床面遺物
出土状況 (南から)



a. 天井石除去状況
(南から)



b. 閉塞石検出状況
(東から)



c. 遺物出土状況近景
(北東から)



a. 基底石検出状況

(南から)



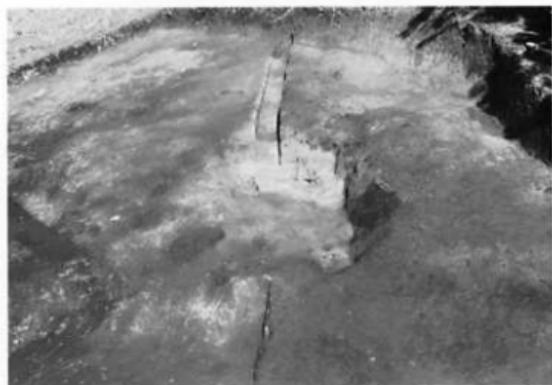
b. 同 上 (東から)



c. 奥壁裏側 (北西から)



a. 掘り方検出状況
(南から)

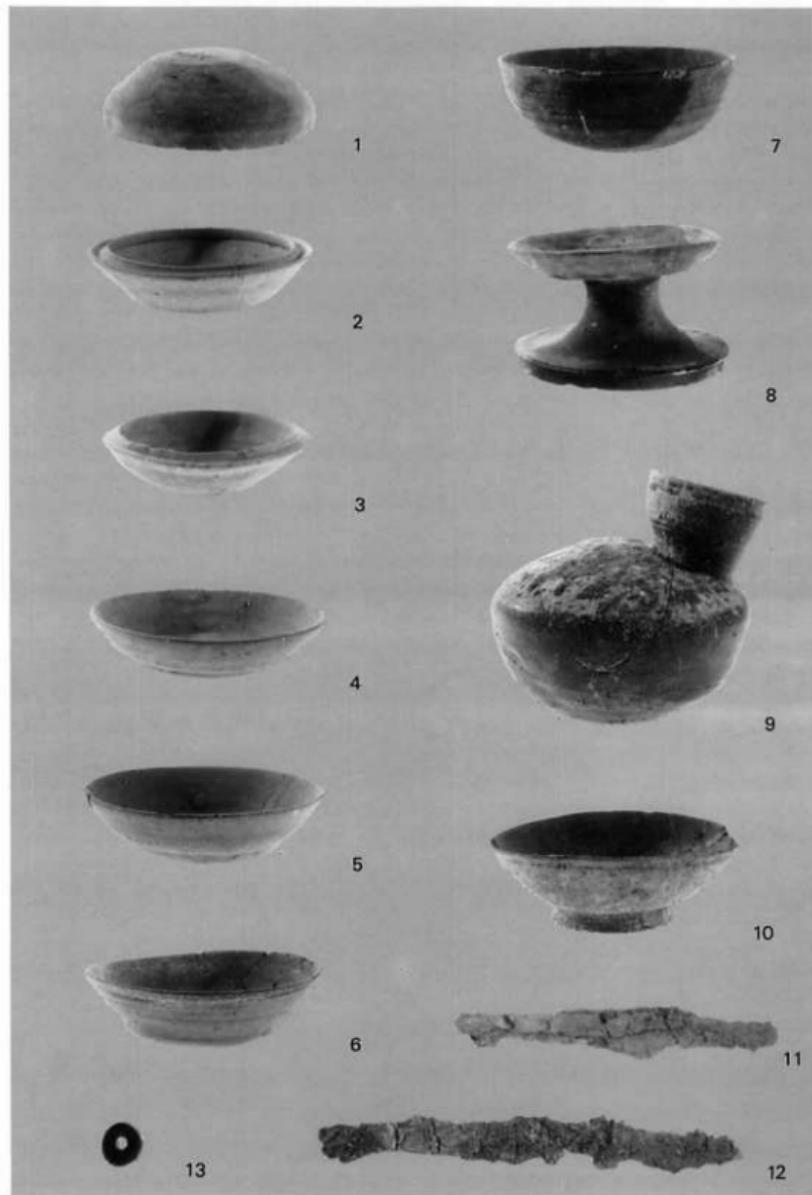


b. 同上 (西から)



c. 遺跡見学会風景





出土 遺 物

広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書 第76集

井 手 山 古 墳

発行日 平成元(1989)年3月

編集・発行

財團法人 広島県埋蔵文化財調査センター

733 広島市西区勝吉新町4丁目8-49

TEL (082) 295-5751

印刷電子印刷株式会社